

## 木炭木槨墓を発見

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



発見された木炭木槨墓（南から）中央右側の土師器の皿は、墓に副葬されたもの。

1993年5月、山科駅前の地下鉄工事にともなう発掘調査で、平安時代、9世紀後半代につくられた古<sup>こ</sup>墓<sup>ぼ</sup>が発見された。調査地は、京都市山科区町と安朱北屋敷町に位置し、山科盆地の中央北辺、すぐ南側に旧東海道が通る絶好の立地条件下にある。この地は、承和十四年(847)文徳天皇の母であった藤原順子(809～871)が発願した安祥寺下寺と推定されているところである。

墓は墓<sup>ぼ</sup>壙<sup>こう</sup>を掘削したのち底に炭を敷き、その中に木棺を安置しその外側に木槨<sup>もつかく</sup>を据え、木槨の外側には木炭をめぐらすという三重構

造をなす。また、木炭の外側にはまったく異なる炭混じりの埋め土が存在する。その状況から、この土と木炭との間にさらに板状の木製施設が存在することも考えられる。

墓壙は東西3.4m、南北2.0mあり、木棺は長さ2.0m、幅0.5m、木槨は長さ2.3m、幅1.1m～1.2mと推定できる。しかし木棺・木槨は、組合せに使われた釘が残ってはいるが、ともに消滅しているためその形態は明らかではない。

墓の上部は平坦であったが、木槨内に落ち込んだ土に版築状の土層が観察され、埋葬当時は封土の

存在が推定できる。また、墓の周りには南に開くコの字状(南北約13.5m、東西9.5m)に一段高くなった段状遺構が確認できた。これは、段の方向が墓の主軸方向と一致する点、段の東西の中心に墓壙が納まることなどから、この墓と関連する施設と考えられる。

墓からは鏡片・乾漆製品・土師器・釘などが出土した。鏡は白銅製で龍文が描かれており、日本での類例は正倉院や法隆寺献納宝物の伝世品に知られるのみである。このような鏡が破鏡(鏡の破片)として墓に収められていたということは、非常に特異な例といえる。

乾漆製品は少なくとも、黒漆と赤漆を用いたものと、黒漆のみを用いた2種類が確認できる。これらは遺存状態が悪く、またこれまで同様な出土例がないため、どのような製品であったのかはわからないが、前者は鏡の周囲から出土したことから、鏡箱の可能性もある。

これまで、この時代の墓として調査された例は、(田)木棺のみを収める木棺墓（平安京右京三条三坊十町一右京区西ノ京徳大寺町）、(月)木棺の外側に木棺を保護する木槨を置く木槨墓（平吉古墓一奈良県高市郡明日香村）、(火)木棺の外側に木炭をめぐらす木炭槨墓（西野山古墓一山科区川田）が主要なものとして知られている。

今回調査した墓は、木槨と木炭槨の両者が存在するため、前記のものに加え、いわば木炭木槨墓とも呼ぶべき墓制の存在が確認されたことになる。ただし、これま



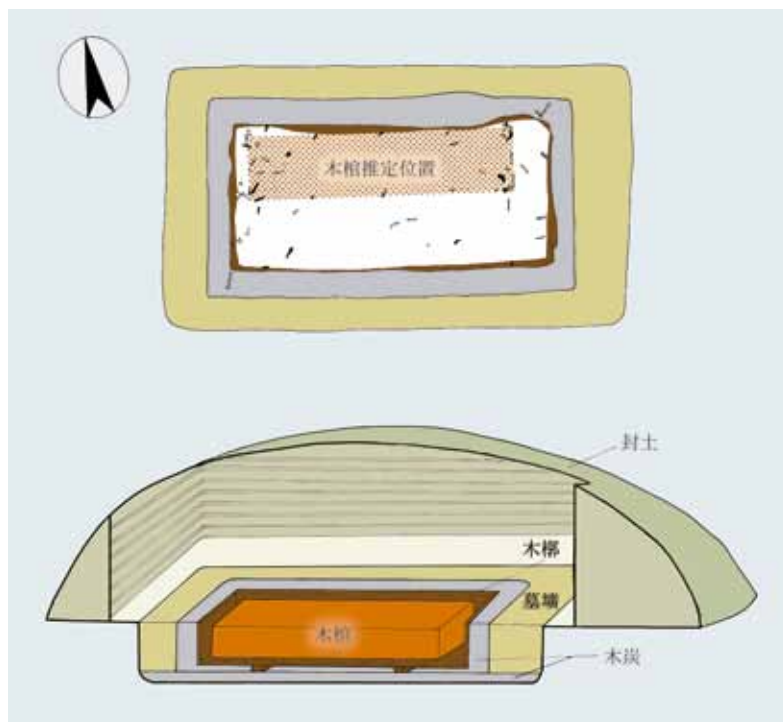
龍文が描かれた鏡片 鏡は復元すると直径約30cmにもなる。

で遺構としての事例はないものの、物が埋葬されたのだろうか。墓か  
『続日本後紀』承和九年（842）七月十五日条の嵯峨天皇の喪葬に関する遺詔（帝王の遺言）のなかに、性別・年齢などの手がかりはまったくない。しかし、その構造・立地・遺物の内容などからみて、山科ならびに安祥寺に関わりの深い、相当高位の人物の墓と考えてもよいだろう。

さて、この墓にはどのような人  
（高正龍）



遺構配置図



木槨の平面図（上）と墓の復元模式図（下）

点々と出土する釘から、棺・槨の構造や大きさがわかる。